

# 地域創生と経済・暮らしのレジリエンス (しなやかな強さ)



年金シニアプラン総合研究機構 理事長  
医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構 所長  
国立社会保障・人口問題研究所 名誉所長  
西村 周三

## 講演要旨

GDPにはさまざまな見方があるが、成長志向と「結果としての成長」は違う。従来GDPの呪縛からどのように逃れるかが、これからの社会づくりのポイントになるだろう。

高度成長期の日本は財産を蓄え、「もの」だけで物事を評価する傾向にあった。しかし、「もの」の価値は変動する。一方、地域社会には目に見えない価値や財産がたくさんある。それらを「見える化」し、失われかけている相互扶助活動やコミュニティをいかに回復させるかを考えるべきではないか。

GDPを議論する上では、「働き方」を考えることも重要だ。産業構造によって働き方は違う。労働時間やお金という尺度でのみ判断される働き方は、出生率にも大きな影響を与える。これからの働き方を再考することが、都市と農村漁村との関係づくりを考える上でのキーワードになるだろう。そのポイントとなるのが、6次産業化で、「働き方」まで含めて1次・2次・3次産業をどうやって結びつけていくのかを考えることだ。そして、社会に役立つ高齢者をどうやってつくるかである。

## 目次

- |                        |                       |
|------------------------|-----------------------|
| 1. はじめに                | 4. GDP議論に欠けているもう一つの論点 |
| 2. GDPの呪縛から「どのように」逃れるか | 5. 「働き方」と産業構造について考える  |
| 3. 地域社会に今ある財産を見直す      | 6. 人口減少社会・超高齢社会の注目点   |

## 1. はじめに

今日の話のポイントは、「GDPの呪縛からどのように逃れるか？」です。次に「地域社会に今ある財産を見直す」という話をします。そして、「働き方と産業構造の関係」について考えたいというのが私の報告の趣旨です。

これから人口が減少し、かつ超高齢化が進む日本は、かなり大きな課題を抱えていると思っています。特に強調したいことは「75歳以上でなければ『高齢者』と呼ばないことにしましょう」つまりもっと正確に言えば、75歳以上でもたくさん元気な方がいますので、そうした方が社会に貢献していただくためにどのようにしたらいいかを考えたい。私も70歳になりましたが、頑張っています。

コミュニティについて、私の注目点は、ある小さな社会におけるコミュニティの緊密さが、時には外に対して閉鎖的になるという問題をどのように考えるかということです。

## 2. GDPの呪縛から「どのように」逃れるか

### (1) GDPについてのさまざまな見方

かつて「くたばれGNP」と言われた時代があったにもかかわらず、しぶとく生き残っているのがGDPです。いまだにGDPを上げるのだとおっしゃる方が少なからずおられますが、なぜそうなるのかを解明したいと思います。

### (2) 成長志向と「結果としての成長」

成長志向と「結果としての成長」は違います。広井先生は、成長志向はもう止めようとおっしゃっていると私は理解しています。ただし、結果として成長するかどうかというこ

とは違います。

最近、これに近いことを、藻谷浩介さんが「お金にとらわれない成長をつくる」という表現でおっしゃっています。つまり、『成長しなければ』と言って何かをやるのではなく、やりたいことをやって、その結果、成長するということはどういうことかをもうちょっと詳細に検討しよう」という意味で、大変印象的な表現だと私は思います。

特に藻谷さんは、都市と地方の関係をどうやって滑らかなものにしていくかという問題意識を持っておられて、さまざまなご提案をしておられます。

### (3) 「定常の中の豊かさ」を考える

では、「結果としての成長」とはいったい何なのか。それについて以前、広井先生と議論したことを紹介します。

最近、CDはあまり売れていませんが、かつてはかなり売れている時代がありました。当然、CDがたくさん売れるとGDPは増えます。これについて広井先生は、「1枚の新しいCDが増えて別のCDが消えるということはまさに定常的なのであって、定常的ということは、毎日同じことをするというのではないのだ」とおっしゃいました。これは、けだし名言です。私たちは何も考えないで、ずっと同じことをいろいろ工夫しながらやる。あらゆるセクターでそういう努力しているわけですから、広井先生のお話は大変大事です。

しかし最近、『経済学私小説：〈定常〉の中の豊かさ』<sup>1</sup>という本を書かれた一橋大学の齊藤誠先生が、かなり違う方向を目指すようになりました。広井先生はCD販売の事例を

1 齊藤誠（2016）『経済学私小説：〈定常〉の中の豊かさ』日経BP社／日経BPマーケティング

あげて、「成長しなくても、毎年売れる曲が違う曲になっている」という話をされていましたが、彼は「ランニングマシンだ」と言っています。

日本のGDPはここ20年くらいほとんど成長していません。だから余計に躍起になって、「成長、成長」と言う人がいますが、齊藤先生は「定常の中の豊かさ」という表現をしながら、「ランニングマシンで私が一生懸命走っている。そして、ベルトがどんどん動いている。一向に前に進みませんが、一人ひとりがすごく頑張っている」という状態に例えて、「この20年の日本経済、結構みんな頑張っているではないか」という表現をしています。

#### (4) GDP奴隷を超えよう

齊藤誠先生の書籍は経済の本です。ご専門ではない方にはちょっと難しいかもしれませんが。しかしこれをお読みいただくと、今の発想がわかります。

「失われた20年」とか「15年間デフレ」という言い方をしますが、広井先生のお話を借りるとこの国は世界で最も豊かな国の一つです。そこで「GDPが減る」とか「増えた」という話をドルのレートで評価するのか、購買力平価で評価するのか、という議論がございます。今日はそれについて議論の外に置きたいと思いますが、とにかく「私どもはGDP奴隷を超えよう」というのが私の原点です。

今、私どもはかなり豊かになっています。これはこの後の大事なポイントですが、第1次産業、第2次産業、第3次産業と、どんどん新しいサービスの経済化が進み、それが豊かさの一つの結果だと考えてきました。そうした現実も踏まえ、これからのあり方を議論

しなければいけないということも、問題提起させていただきたいと思います。

#### (5) 「もの余り経済」と「もの不足経済」

日本の社会全体を見ると、まだ多くの地域は「もの余り経済」です。しかし被災地に行ってみると、さまざまな意味で「足りないもの」がたくさんあります。ちゃんとした家に住むことができない方もたくさんおられるわけ。その反面、そこらじゅうに空き家が増えてきたという日本の現象は、矛盾以外の何ものでもないと考えることができます。

私は関西出身ですが、5年前の震災が起きる直前くらいから東京に勤務していました。しかしお恥ずかしいことに、東北地方のイメージがどうしてもできませんでした。その後、被災地を訪れて本当にショックでした。関西と比べると、相当文化が違う印象で、かなり戸惑いました。

先ほど広井先生も、東京都のものは東北で生産されるもので成り立っているとおっしゃいました。「もの」もコミュニケーションの一つの手段ですが、これからは「ものだけで物事を評価する」「ものだけをイメージしてコミュニケーションする」という社会をどうやって変えていくかがとても大事ではないでしょうか。

#### (6) 日本における中古品市場の現状

少し例を紹介します。日本における中古品市場の現状は本当に寂しいものがあります。超高齢社会で、一部に「断捨離」という言葉が言われています。私ももう70歳になりましたが、ほとんど使わない余計なものをたくさん持っています。でも、これをどうやって必要としている方のところへ持って行くかというのは、意外に簡単ではないのです。

ご承知だと思いますが、「俺はこのシャツは要らない。だから被災地に寄付する」と言って被災地へ送ったら、誰も欲しがらなかったということがあります。そのこの取引をこれからどうやっていくのか。誰が、何を本当に欲しているかというデータをどのようにして集めるのか。

もちろん、足で歩いて、そこで何が必要とされているかを実感するのがスタートだとよく言います。しかし、まずは顔の見える関係をつくって、一回帰る。その上で、あそこで必要としているもので私が必要としていないものはないかを考えることになります。実はこうした話は本来、市場というものの割と根源的なものの考え方のスタートになります。

### (7) 中古住宅市場の現状

そういった取引をやる場合に、いかに日本は中古住宅市場が発展していないかがわかります。その理由として、よく「石の文化と木の文化の違いだからどんどん壊す」という話をおっしゃる方がおられます。まだ十分使えるのに、誰も使っていない家がどんどん増えてきました。その結果、残念なことに日本の中古住宅市場は他の国と比べていかに遅れているかを目にすることができました。

こうした状況に国土交通省は問題意識を持ち、平成25年から「中古住宅流通促進・活用に関する研究会」を設置しました。

### (8) 移ろいやすい住宅ストックの資産評価

なぜ、こうした話をしたかという、日本は高度成長期に一生懸命働き、ものを貯めようとしてきました。その一つの代表が住宅です。それ以外にもいろいろな財産を保有する豊かな国になりましたが、GDPは月々あるいは年々どれだけのお金が入るかというフロー

なのです。それが貯まってくると、それは国富や個人の財産になります。これをストックと言います。この財産を貯めるために、一生懸命働いてきました。

しかし、マネー資本主義が恐ろしい理由の一つは、持っている財産が突然消えてしまったり、価値をどんどん下げることがしばしばあるということです。実際問題として、こんなにお金を出して、住宅ローンで借りて家を建てたのに、その使ったお金に比べて現在の価値がいかに低いことか。

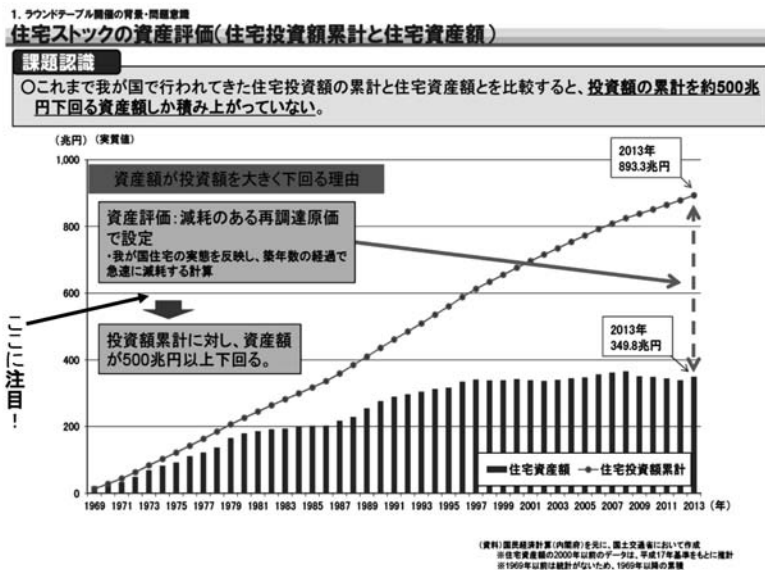
そこで国土交通省は、中古住宅・リフォーム市場活性化の経済波及効果を一生懸命に考えました。例えば、金融資産や住宅資産などを含めた家計の総資産総額は2,686兆円になり、今の日本社会はこれくらいの財産を持っていると言われています。しかし、これは明日にもドーンと値打ちが下がるかもしれないのです。一生懸命お金を貯め込んで「やったー」と思っていたら、ある日、「値打ちがなくなりました」となるかもしれません。

これは今、都会で起きていることです。5,000万円で買ったマンションが、ある時期7,000万円に上がったと喜んでいたら、今は2,000万円になってしまい、それではどうしても売ることができない。人間というのは、いくら古くなったとはいえ、5,000万円で買ったマンションを2,000万円で買うと言われたら、「ちょっと待って。置いておくわ」と考えるわけです。ですから、こうした資産がいかに移ろいやすいものであるかを強調しておきたいと思います（次頁図1）。

## 3. 地域社会に今ある財産を見直す

### (1) ストックの活用

もっと大事なことは、広井先生の「自然」の話です。自然という財産を私たちは持って



(図 1)

います。さらに中沢新一先生がずっとおっしゃっているように、例えば私たちが先祖を敬うといったような、そういうさまざまな宗教的な意味合いを持った象徴的な価値もたくさんあります。ただしこれは、毎月あるいは毎年置きにちゃんと維持管理する努力をしなければ、どんどん価値が下がっていくものではないかということです。

今までは私たちが持っている私的財産の話をしましたが、意外にこの国は、高度成長の中で公的な財産をたくさん貯めてきました。これをどうやって活用するかということも、これからの地域コミュニティにとってはとても大事な話です。

それには入会地の話などいろいろあるのですが、意外に簡単ではありません。10人のうち9人が「これをみんなで仲良く使おう」と言っても、1人が「嫌だ」と言ったらこれを有効活用することはなかなか難しい。ここに関しては後で広井先生と中沢先生にお教えいただこうと思いますが、そうしたものを地域コミュニティで有効に活用するための手立て

は何かということは考える必要があります。

特に、見えないものはある程度「見える化」しないと見けません。その事例として、藤沢の小規模多機能施設「あおいケア」の私有財産がいかに公的に有効活用されているかという話を後で紹介しましょう。

ちょっと古いデータですが、公的財産は454兆円あると推計されています。この数字が大きいか少ないかは時間の関係で申し上げませんが、とにかく結構

たくさんあるということです。

(2) 目に見えていない経済変数

さらに私たちには、目に見えないために考えてこなかったことがたくさんあります。

まず、家事労働そのものがかなり変貌しました。これは次の働き方の話との関連で、あえて申し上げます。

そして、地域の相互扶助活動です。昔のデータはあまりないのですが、もしこれを経済的価値に評価するとすれば、これがまさに広井先生がおっしゃったGDPに代わる指標として注目されているところであり、それにどのくらいの価値があるかということがこれからの課題なのです。おそらく、多くの地域で相互扶助活動は減退してきた歴史があります。それを失っているという観点から、私たちはこれをどうやって回復するかを考えることが大切です。

また、おもしろい研究があって、『つながり：社会的ネットワークの驚くべき力』という本をアメリカのハーバード大学のクリスタ

キスという人が書いています<sup>2</sup>。アメリカの事例です。帯には「肥満は伝染する」と書いてあります。つまり、私たちは地域の周りの人間にいかにか影響されるか、ということです。昔は日本だけがそうで駄目だという雰囲気があったと思いますが、けっして日本だけのことではありません。クリスタキスは、「周りの人間が健康になってくると自分も健康になれる」ということを研究しています。

このような話は認知症のコミュニケーションにも関係しています。コミュニケーションを上手に取れる人のほうが認知症になりにくいという研究はたくさん出ています。ただし、なりにくいという話で終わらないでください。認知症になった後にどうするかという、もっと大事なテーマを後で問題提起します。

### (3) 介護予防事業を活用した地域づくり

高齢者医療の研究については、千葉大学がすばらしい先生をたくさん輩出しておられます。近藤克則先生という方は、愛知県武豊町で介護予防の成功事例の研究をしています。

ここでの大事なポイントは、「地方のほうがコミュニティの交流がしっかりしていて、大都会はコミュニティの関係がない」ということではないということです。地方都市でもコミュニティの関係が希薄なところもあれば、逆に大都会の団地ですごくうまくいっている事例があるということを、近藤先生は研究しておられます。

以下、近藤先生に教えていただいたことの紹介です。1つ目はちょっと笑えてきますが、「公園の近くに住む人は1.2倍頻繁に運動する」。これはまちづくりの問題提起にもなりますが、車社会をどうやって変えていくかとい

うことも結構大事なテーマになるかと思えます。最近では「都市計画は健康政策でもある」という観点の研究がかなり増えてきました。

2つ目は、「サポートの有る無しによって、うつになるかどうかということが違う」ということを示しています。

## 4. GDP議論に欠けているもう一つの論点

### (1) GDPと労働時間の関係

GDP議論に欠けているもう一つの大事なポイントは、「労働時間との関係」です。

第1次産業、第2次産業、第3次産業によって、それぞれの働き方は相当違います。しかもそれは、単に労働時間が長さだけで測ってはいけないというのが私の問題提起です。

### (2) 労働時間をどう考えるか

私は若い頃に農業をやっている地域に住まわせていただいて、そこで感じたことがあります。そこでは毎朝、レタスをマーケットに出すかどうかということに対して、市場価格にすごく敏感に反応して予想しておられることを勉強しました。もちろんレタスをおいしくするための研究はやっておられますが、同時に朝、有線放送を聞きながら、今の市場の実勢がどうなっているかをすごく勉強していました。そのような時間を「労働時間」と言うのでしょうか。

実は、僕ら古い頭のステレオタイプの間にとっては、農作業なら農地に出て、そこで体を動かしている間だけが「労働時間」だという気がします。でも、それは違うということをや若い頃に勉強しました。

当時の農業・水産業は、先ほど言ったよう

2 ニコラス・A. クリスタキス, ジェイムズ・H. ファウラー著, 鬼澤忍訳 (2010) 『つながり: 社会的ネットワークの驚くべき力』 講談社

な時間を入れずに単純労働時間を計算すると、割と少ない労働時間になります。怒られるかもしれませんが、朝早く起きて草取りや何かをする。しかし、昼間はぼうっと本を読んでいる。「これは労働時間なのか、それとも勉強の時間なのか」というようなことがたくさんありました。

### (3) 労働時間の定義による弊害

その後、製造業がどんどん増えていく中で、当然ながら「自然に影響される働き方」についての発想はなくなり、製造業の発想で労働時間は考えられてきました。つまり、「何時から何時まで働く」ということをもって「労働時間」という定義をし、それが「長いか短いか」、あるいは「お金になる労働か」「お金にしようとする労働か」という尺度で判断されるようになりました。

これはとても大事なことで、この労働時間の考え方が実は自営業を減らし、お祭りを減らすことになってしまった原因でもあります。どうしてかというと、自営業の方は比較的労働の仕方が自由です。しかし、「今日は店を閉めて祭りだ」と言ったら、その時間は働いていないから収入は減ります。だからお祭りをしなくなりました。しかし、実はそのことの社会的価値は大変大きいのです。

これはアメリカ的経済学の弊害です。アメリカ的経済学は労働と余暇を分けて、「労働は不幸せを招く。余暇は幸せ。だから余暇が多いほうがいい」という発想で、労働時間の短縮が国際的に広がった歴史があります。

そのようなことを考えると、「働き方」を考えることが、特に都市と農山漁村との関係をどうやってつくっていくかのキーワードになるのではないかと。そのことを、先ほどの広井先生の問題提起を受けて申し上げておきます。

## 5. 「働き方」と産業構造について考える

### (1) 出生率を考える

さらに、「働き方」は出生率に大きな影響を与えることを問題提起いたします。

出生率、既婚率、未婚率などのデータを詳細に調べてみると、日本の場合は出生率と未婚率がだいたい対応しています。つまり、フランスは結婚しなくても子どもができるケースがたくさんありますが、日本はそうではなく、「結婚する」と「子どもをつくる」とは、割と正の相関があります。

残念ながら、農業に関しては男性と女性とでちょっと違います。男性の第1次産業の未婚率はそんなに高くないのですが、女性は高い。つまり、ちょっと言葉は悪いですが因果関係が逆で、女性は結婚して農業に従事することは少ないということです。ただし、もっと最近のデータを精査する必要があります。

逆に、よくブラック企業という言い方をしますが、やはり第3次産業では結婚が難しい産業が多いことが窺えます。

意外なのは、第2次産業の製造業です。最近の製造業の労働時間は、昔と比べてかなり短くなりました。簡単に言うと、決まった時間に決まった時間だけ働くという傾向があるので、割と結婚はしやすい。むしろ、飲食業や旅館業の未婚率が高いです。これはあくまで問題提起ですが、「働き方」は出生率にも関係しています(図2)。

### (2) 「働き方」と産業構造

簡単にまとめると、「働き方」は産業構造によってかなり違います。特に、第1次産業はかなり違います。漁業などはまさにそうで、時化があったら家でゆっくりしているしかないわけですが。だから働き方は柔軟です。しかし、自然に影響されます。

第2次産業は、労働時間が割と長いケースもありますが、働き方は規則的です。

第3次産業は、本来の仕事から考えたらもっと柔軟な働き方をしてもいいはずなのに、どうも1次と2次、特に2次産業の呪縛から抜けていないという印象を持ちます(図3)。

豊かさの感覚に関しては、第2次産業は基本的に「もの」を作ります。一方で第1次産業は、「最低限必要なもの」という特徴を考えることができます。

### (3) 6次産業化を考える

だからといって、私はここで「もっと第1次産業を頑張ろう」という単純な話はしません。むしろご承知のように、1次と2次と3次をどうやって結びつけていくかが、これからの産業のあり方としては大事です。果物を作ります。野菜を作ります。この作った野菜を消費者に届けるために、どのような工場で、どのような形で生産物にするか。かつ、それを第3次産業を通してどのように消費者に届けるか、ということです。もちろん産直です。

一番わかりやすい事例として、最近、学校給食がすごく大きな変化を遂げてきていると

いう事例を勉強しました。それは「食育」です。これは日本独自のもののようですが、正確に言うと、アメリカやフランスがかなり真似ています。

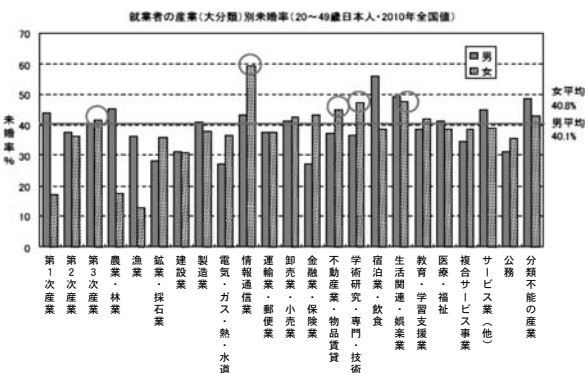
例えば食育を考えたときには、「農家でものを作る」ということを小学生に学ばせるところからスタートして、「それを製造物である給食として皆さんに配っている」と。これは製造業です。さらに、「それにはどのような栄養分があり、野菜が身体にいい」などということ勉強する。これは第3次産業です。こうしたことを一貫して考えていく例として、給食が一つのヒントになります。

ちなみに、「給食」「スクールランチ」というキーワードでネットを検索すると、一日中飽きません。世界中で議論が盛り上がっています。最近ではアジア開発銀行が、「食育」という観点から肥満のもたらす社会的費用の研究を始めました。びっくりしたのは「パラオはタロイモばかり食べるから肥満が多くてどうしたらよいか」と言うので、私は「給食を導入しませんか」という話をしました。

そういった話も含めて、1次、2次、3次をどうやってつなげていくかが、これからの

## 出生率を考える 4

イ 第3次産業就業者の未婚率について  
20～49歳の就業者について、産業別に未婚率を見たのが次のグラフです。



(図2)

## 働き方と産業構造

	第1次産業	第2次産業	第3次産業
働き方	柔軟、しかし自然に影響される	規則的	1次、2次からの呪縛が抜けていない!
豊かさの感覚	最低限(?) 必要	もの	お金になることとならないことの区分不明確

注：第3次産業は、ベテリの定義後に拡大したものが多く、雑多なものが含まれていることに注意。「もの」と「サービス」がセットで売られることが増えている。(特に日本で・・・)

(図3)



産業構造のあり方として大事なポイントとなるのではないかと思います。

## 6. 人口減少社会・超高齢社会の注目点

### (1) 軽症認知症患者をどうお世話するか

今、厚生労働省が中心となって、地域のローカルコミュニティをどうやって活性化するかという観点から、「地域包括ケアシステム」を話題にしています。

この話は省略しますが、今、軽度の認知症患者の方をどのようにお世話していくかが、大きな社会的問題として岐路に立っています(図4)。ご承知と思いますが、認知症の方のJR事故について、最高裁の判決がありました。今回の原告はJRでしたが、もし被害者が出たら誰がその損害賠償をするのか、という話が出てきます。

そこで両極端に分かれます。一つは、そうした人はやむを得ないから施設に入れる。も

う一つは、地域社会を変えて、いろいろ周りを散策される人をちゃんと地域で支援するという方向です。広井先生の話の続きをすると、後者の最先端を行っているところはローカルなところから発生しています。例えば福岡県大牟田市は認知症サポーター制度がかなり普及し、さらにその少し上に行く展開を始めています。

### (2) 藤沢市の「あおいケア」の例

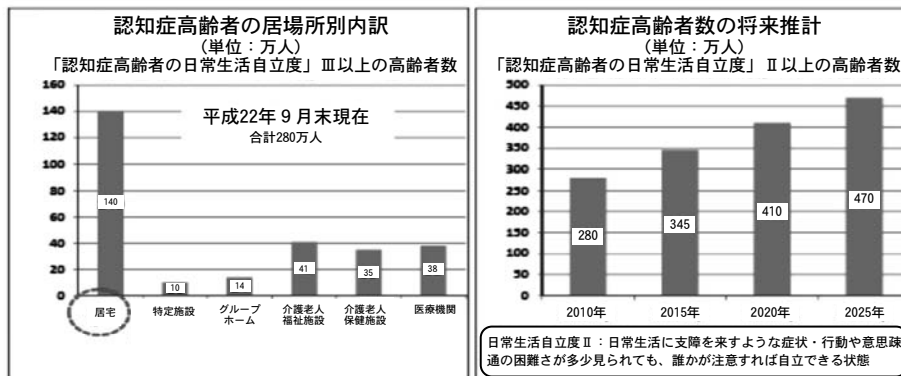
新しい展開の事例として、神奈川県藤沢市の小規模多機能居宅介護施設「あおいケア」を紹介します。

「あおいケア」内にあるグループホーム「結」は、比較的軽度の認知症の方が来られる施設です。その隣にはデイサービス「いどばた」があり、誰でも来られるような場所になっています。たまたまここは平地だからいいのではないかという話があるかもしれませ

# 地域に開放できるか？ 軽症認知症患者

## 認知症高齢者の現状と将来推計

- 要介護認定データによる認知症高齢者数は、平成22年9月末で280万人であった。
- 2020年には、認知症高齢者が400万人を超えると推計されている。



出典：「認知症施策推進5か年計画（オレンジプラン）」平成24年9月公表の数値をグラフ化

(図4)

## 数多く起きている医療・介護のイノベーション



(図5)

んが、本当に自由に、ここをみんなが行き来しています。保育園や小学校帰りの子どもたちも、ここに来て遊ぶのです。そして、その小学生を相手にお年寄りがお世話をします。その方は軽度の認知症の方だという事例があります。このように、さまざまな展開が進んでいます。

### (3) 進む医療・介護のイノベーション

簡単に言うと、今、医療・介護の世界で起きているイノベーションは、「業務→自立支援・CARE→社会参加」へと進んでいます。

「業務」として職員が掃除するのはもう古い。「自立支援・CARE」として被介護者が自分のいるところと一緒に掃除するところから、さらには地域に出て行って掃除をする「社会参加」になっています(図5)。

### (4) 介護予防の新しい流れ

さらに今は介護予防も重要です。どうしてもお年寄りは役に立たない存在であると言われてがちです。もちろん、だんだん身体は弱っていきますが、それでも世の中に役に立つこ

とがたくさんあります。その事例として、先ほど愛知県武豊町を紹介しました。

同時に、家の中に閉じこもる方はどうしても身体が弱っていくので、その人を外に出して、みんなで介護予防するような活動をどうやって展開するかということも、新たな課題としてあります。

### (5) 役に立つ高齢者をどうつくるか

結論です。私は医療・介護の専門家です。その分野から見て、やはり超高齢化は間違いなく当分進みます。少子化の問題は、確かに何とかしないとイケないと個人的には思っています。

しかし、少子化の問題は結構時間がかかります。当たり前ですが、20歳になるまでに20年かかります。その観点から言うと、やはり当分は、「役に立つ高齢者をどうやってつくるか」ということが一つのポイントになります。これが、先ほど申した「働き方を変える」ときの一つの示唆となります。

若い人は、決まった時間働いて拘束される傾向があります。割と自由な働き方ができる高齢者を、どうやって社会に生かしていくか。これが、広井先生が問題提起された「これからのグローバル化の先にあるローカル化」への一つの答えになるのではないかと考えます。

